抑圧されたパフォーマーの労働と創造性
――アイドルを事例に――

慶應義塾大学大学院　上岡磨奈

１．目的

アイドルと名乗ってパフォーマンスを行う若者について、その活動を労働とし、その労働における抑圧の構造とその中で発揮される創造性を考察する。アイドルのパフォーマンスは自作自演よりも定められた楽曲、振付での音楽パフォーマンスを行うことが多く、また「事務所」と呼ばれる組織にスケジュールを管理され、活動はすべてその指示のもとに行われている。この一見、主体性、自主性を欠く環境の中で創造性を発揮するとはどういうことかを検討する。

２．方法

2009 年 11 月から断続的に行ってきた報告者自身によるアイドル活動、および 2017 年 12 月より行ってきた事務所 A での参与観察と 20 代のアイドル 1 人の生活実態調査を元に、アイドルの労働環境や仕事内容、それぞれの仕事に対する態度、振る舞いについての半構造化インタビューを 2019 年 4 月 8 日 ?30 日まで 20 代 ?30 代の男女 8 人（前出の 1 人を含む）を対象に行った。対象者は事務所に所属し、数万人規模の大型フェスへの出演経験など一定数のファンと知名度を得ているアイドル活動経験者である。本報告では、これらの調査、インタビューによって得られたデータを中心に分析と考察を行う。

３．結果

インタビュイーの語りからアイドル活動中は事務所に 365 日 24 時間アイドル活動を最優先することを求められ、ほぼ毎日アイドルとしての仕事があり、程度はそれぞれの生活背景によって異なるがそれによって経済的困窮や精神的抑圧が生じること、同時にステージ上でのパフォーマンス技術を向上させるのに十分な時間が取れないことが明らかになった。彼らはダンスや歌、演技などの表現活動に関心を持ちアイドルとしてのキャリアをスタートしているが、十分な技術よりもステージに上がることそのものが優先され、その評価や報酬もパフォーマンスの内容に直結してはいない。彼らの表現力の研鑽への欲求とそれを可能とも必要ともしない環境との歪み、またこれらの表現活動に関わる仕事を事務所や仕事の依頼者に「やらせてもらっている」という共通の認識があることから、アイドルの創造性はパーソナリティーを土台とした振る舞いや、それに伴って発生するファンへの語りや接し方などに集約されていくことが明らかになった。

４．結論

アイドルはクリエイティブ産業において楽曲やダンス、ファッションなど様々なクリエイションの表現形式の 1 つであり、パフォーマーであるアイドル本人には観客やクライアントからその身体とパーソナリティに伴う創造性を求められる。しかしその労働環境は他者からの制約が多く、ステージパフォーマンス上の創造性よりもアイドル的な振る舞いがアイドルの労働における創造性の中心となっていると本報告では結論づける。